

説教 『地上、地下、天上で救われる』 山本護 牧師  
聖書 詩編 51:1~14 / フィリピの信徒への手紙 2:6~11

待降節から降誕祭まで、ひと月あまりクリスマスの御言葉を聞いて来た。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た(ヨハネ 1:14)」。その栄光を見た、その栄光を聞いた。降誕の奇跡を見、聞き、受け取った。新しい年、これを受け取った者として、改めて出発しよう。

「言は肉となって～宿られた」が記述される以前、パウロはより詳しく記している。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分となり、人間と同じ者になられた(フィリピ 2:6~7)。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった(ヨハネ 1:1)」という修辭的な言いまわしは広く知られているが、これも「神の身分でありながら～神と等しい者であることに～」というクリスマスの使信と響き合っている。

それにしても降誕の奇跡は、私たちにどう関係して来るのか。端的に言えば降誕は、「神が人間を引き受け給うた」出来事。降誕によって、私たちの弱さは、みっともなさ、罪の隅々は、取りこぼしなく引き受けられている。キリストが降誕されることで、神が「人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順だった(フィリピ 2:7~8)」現実が、確かに起こった。

人間には罪もあるが善も少しあり、醜もあるが美も少しある。その内、罪が赦され、醜が清められ、哲学者が唱える「真・善・美」の類に成長するのか。私の全存在のうち、健康な部分と病の部分は分けられるのか。調和する私と偏っている私を分けることができるのか。否、それは現実ではない。罪がある私はここに居るし、弱くみっともない私としても、ここで呼吸している。だからこそ、キリストは、私の全体をまるごと引き受けるために「十字架の死に至るまで従順」となられた。

私たちは降誕の奇跡を聞き、感じ、「神が人間を引き受け給う」真実を「身をもって」知った。もはや私は、私のものではない。私は、すでに救われており、救われる努力をしていく必要はない。それでは新しい年を迎え、私たちは何に仕え、何のために働けばいいのだろうか。正月風景にあるごとく、飲んで食って、炬燵で居眠りしていればいいのか。すでに私は贖われ、救われ、私は私の所有物ではないのだから。そうだ、しゃかりきになって自分で自分を救うよりも、居眠りの方が外れていない。

「天上のもの(永遠の命)、地上のもの(限りある今の私)、地下のもの(死)がすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、[イエス・キリストは主である]と公に宣べて、父である神をたたえる(2:10)」。居眠りもいいが、この応答くらいは誠実に果たしたい。つまり神の御前で「すでに救われている私」のまま立つこと。降誕されたキリストは「地上のもの」として歩み、十字架で「地下のもの」となり、復活して「天上のもの」に戻られた。これら全次元において、私たちは引き受けられている。「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されている(コロサイ 3:3)」。

キリストと共に神の内に隠されながらも、地上のものとして歩む間は、新しく確かで(詩編 51:12)、聖にして(51:13)、自由な(51:14)キリストの霊と共にある。すべてを創造される霊(51:12)と共にある。



【おまけのひとこと】

新しい年を迎えた 新しい朝を迎えるように 瞬間々々新しい出来事を迎えるように  
それらがくり返されて 新しい命を迎える日が来る 私の内におられるキリストが 私と共にこれを迎える